



鳥取県米子市における 「子ども第三の居場所」 コミュニティモデル の運営(最終年度)

te to te
~つなぐん家~



2024年度活動報告書

一般社団法人 つなぐプロジェクト

Supported by  日本 THE NIPPON
財團 FOUNDATION



1.事業計画

(1) 【目的】

生き抜く力を育む「子ども第三の居場所」を運営する。
行政、NPO、市民、企業の方々と協力し、誰一人取り残さない
地域子育てコミュニティをつくることで、「みんなが、みんな
の子どもを育てる社会」を目指す。

(2) 【目標】

- ・2025年3月31日までにの一日平均利用児童数を15名にする
- ・ボランティア等の地域住民や、行政、学校との関係構築、多世代交流機会の提供
- ・子どもの「経験の不足」を解消するような定期的なイベントを事業期間内に3回実施する

(3) 【事業内容】

鳥取県米子市における「子ども第三の居場所」コミュニティモデルの運営

- ・期間：2024年4月1日～2025年3月31日
(週5日、9時から20時まで開所)
- ・場所：鳥取県米子市
- ・対象：20名（家庭や自身に課題を抱えた小中高生を中心）
- ・内容：子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や学ぶ意欲向上を支援することで社会的相続を補完する。





2 事業実績

(1) 登録者 71 名

区分	小学生	中学生	高校生	18歳以上	合計
人数	47	15	7	2	71

(2) 【学習支援・学校連携実績】

①午前中の支援活動

・精神的なサポートの実施

午前中は、学校に行けなかったことで落ち込んでいたり、精神的に不安定な子どもたちが多く見られました。そのため、子どもたちの話を聞くことを重視し、心のケアを行いました。

・気分転換の活動

天気の良い日は、街への散策や公園で体を動かす活動を行い、子どもたちの気分転換を図りました。また、おつかいを体験するなど、「できた」という成功体験を増やす活動にも取り組みました。これにより、子どもたちの自己肯定感を高めることを目指しました。

・まとめ

このような活動を通じて、子どもたちが少しでも心を軽くし、前向きな気持ちを持てるようサポートしていきたいと考えています。

②不登校・学校を休みがちな子どもへの支援活動

・子どもたちの状況理解

不登校や学校を休みがちな子どもたちは、気持ちが不安定な状況で利用することが多く、「学校」というキーワードに対して顔を曇らせたり、泣き出す子どももいます。また、学習面に不安を抱えている子どもたちは、「学習」や「勉強」という言葉を嫌がる傾向があり、机に座って鉛筆を持つことはできても、そのまま固まってしまい泣き出すことがよく見られます。

・静かな時間の設定

このような状況を踏まえ、昼食後は「静かにする時間」として、まずは静かに椅子に座ることから始めました。鉛筆の代わりに色鉛筆やクレヨンを使い絵や塗り絵を行うことで、リラックスした環境を提供しました。また、文字を読むことを嫌う子どもには、絵本の代わりに折り紙を折るなど、子どもた





ちの状況に合わせた柔軟な対応を行いました。

- ・学習への取り組みの変化

その結果、次第に子どもたちの心が落ち着き、色鉛筆を鉛筆に持ち替え、絵本を教科書に持ち替えて学習に取り組み始める姿が見られました。

- ・まとめ

このような取り組みを通じて、子どもたちが安心して学びに向かえる環境を整え、学習への意欲を高めることを目指しています。今後も、子どもたちの状況に応じた支援を続けていきたいと考えています。

③学習支援の取り組み

- ・学習支援の実施

学習支援では、学習に取り組める子どもたちに対し、各教科ごとにどこに困り感を持っているのか、どこでつまづいているのかを確認することから始めました。

- ・つまづきの分析と対応

教科書を中心進める中で、例えば割り算でつまづきを感じている子どもたちの多くは、掛け算を理解できていないことが見受けられました。そのため改めて掛け算の学習から取り組み、復習をしながら一つ一つ理解できるように進めました。

- ・個別の学習進捗

教科書を順調に進められる教科もあれば、苦手な教科もあるため、一人一人違って良いことを伝え、学習はスピードではなく、一つ一つ理解することが大切であると教えています。

- ・学習支援体制の構築

学習支援体制は、できる限りマンツーマンもしくは、一人の支援者に対して3人までを基本とし、一人一人のスピードや学習困難に合わせたサポートを行っています。また、学校との連携を図り、各クラスの進捗状況やその子どもに対する支援計画を確認しながら伴奏支援を行っています。

- ・まとめ

このような取り組みを通じて、子どもたちが自信を持って学びに向かえるようサポートし、理解を深めることを目指しています。今後も、個別のニーズに応じた支援を続けていきたいと考えています。

④遠隔学習と学校連携の取り組み

- ・遠隔学習の実施

学校や保護者と相談の上、対応可能な学校では配布されているChromebook





を使用して、拠点と教室をつなぎ、遠隔で授業に参加できる環境を整えました。授業に参加することが難しい場合には、帰りの会などにChromebookで遠隔参加することができました。

- ・e-ラーニングの活用

遠隔学習ができない学校では、e-ラーニングを通じて学習を行いました。これにより、子どもたちが学びの機会を失うことなく、継続的に学習を進めることができました。

- ・学校との連携

拠点には、先生方が気軽に生徒の様子を観に来られる環境を整えました。必要に応じて、保護者、担任、校長、教頭、生活指導、スクールソーシャルワーカーと連携し、支援者会議を行いました。この会議では、子どもの状況を共有し、その子に合った支援を検討しました。

- ・つながりの構築

このような取り組みを通じて、子どもと学校のつながりが途絶えないよう、関係性を構築することができました。子どもたちが安心して学び続けられる環境を整えることを目指しています。

- ・まとめ

今後も、学校や保護者との連携を強化し、子どもたちの学びを支えるための取り組みを続けていきたいと考えています。

(3) 【生活支援・相談支援】

- ・生活リズムの改善支援

昼夜逆転など生活リズムが崩れている子どもに対して、利用者および保護者それぞれと相談時間を設けました。1日の流れを書き出し、どこに原因があるのかを一緒に考え、一つ一つ問題点を探り、解決策をともに検討しました。段階を踏みながら実行できるよう、伴奏支援を行いました。

- ・通所支援の実施

家庭環境に応じて、朝に家族がいないため一人で起きられない子どもや、自力で通所ができない子どもに対しては、送迎を行い、通所につなげる支援を実施しました。

- ・保護者への支援

利用者の伴奏支援と同時に、育児による保護者の鬱状態やネグレクトの家庭に対しても配慮しました。送迎時に保護者がいつでも相談できる環境を作り、ストレス軽減のための提案や保護者の伴奏支援を行いました。その結果、母子関係や生活リズムの改善につながった例もあります。





・専門職との連携

専門職の支援が必要な場合には、的確な関係機関につなげられるよう臨時理事会を開催し、検討を行いました。関係機関と情報を共有しながら伴奏支援を行い、より効果的な支援を目指しました。

・まとめ

今後も、生活支援や相談支援を通じて、子どもたちとその家族が安心して生活できる環境を整えるための取り組みを続けていきたいと考えています。

(4) 【学校・地域・行政との関係構築実績】

・登校利用者の学校とのつながり

不登校利用者の所属校とつながるため、保護者に学校へ拠点の利用・支援状況を説明していただき、拠点とのつながりを作っていました。同時に、学校へ連絡を行い、拠点の見学をしていただけるよう環境を整え、随時見学可能な体制を整えました。

・担任の先生との連携

担任の先生と利用者の情報共有を行い、その子にとって必要な支援について話し合いました。これにより、学校と拠点の双方から同じ方向性で伴奏支援を行える環境を整えました。その結果、完全不登校だった子どもが週に1～2回、1時間程度の授業を通じてクラスメイトとの交流ができるようになりました。

・専門職との連携

体調面への不安や発達障害を持つ利用者に対しては、病院、理学療法士、学校と連携し、専門職による支援提案のもと、一人一人に合わせたサポートを行いました。サポートの結果については専門職にフィードバックし、サポート方法を見直しながら、その子に合わせた伴奏支援を行いました。その結果苦手としていたことや気になることがあった場合の繰り返される言動が減少し、できることが増え、その子なりの成長が見られるようになりました。

・要保護児童対策協議会との協力

要保護児童対策協議会（要対協）対象児童の利用に関して、自治体児童相談所や医師と連携し、対応について協議を行いました。これにより、支援体制を整え、より適切な支援を提供することが可能となりました。具体的には、各関係機関との情報共有を通じて、児童の状況に応じた個別の支援計画を策定し、実施することができました。また、定期的な会議を設けることで、支援の進捗状況を確認し、必要に応じて支援内容の見直しを行うことができました。このような取り組みにより、要保護児童に対する支援が一層強化され





子どもたちが安心して生活できる環境を整えることができました。

・地域との連携

社会福祉協議会などの協力を得て、地域の方々に拠点の活動を知っていただく機会を設けました。その結果、ボランティアや絵本の提供など、子どもたちの力になりたいと気軽に声がけいただけるようになりました。このような地域の方々とのつながりは、子どもたちにとって大きな支えとなっています。

・地域企業との関係構築

ロータリークラブ、ライオンズクラブ、商工会議所など地域企業が集う環境で講演を行い、子どもたちの現状や拠点の取り組みを紹介しました。この取り組みにより、地域企業からの理解と支援が得られ、応援企業が増加しています。地域の企業との連携は、子どもたちに対する支援の幅を広げる重要な要素となっています。

・地域との連携と支援活動

地ビールフェスタ in 米子への参加や自治体が行っている中心市街地活性化事業に取り組んでいる角盤町商店街振興組合と、中心市街地活性化の起爆剤として実施されている「地ビールフェスタ in 米子」の実行委員会の大きな協力を得て、継続的に拠点ブースを設けていただいている。このブースでは寄付活動を実施し、地域の方々に子どもたちの現状と拠点の取り組みを知っていただく機会を得ています。また、利用者にとって社会活動の場を提供していただきながら、地域とのつながりや地域の方達との交流を深めることができます。

・鳥取大学医学部との連携

鳥取大学医学部の学生ボランティアサークルとの協力体制を構築し、ボランティア活動（学習・遊びサポート）の場を継続して提供いただいている。さらに、医大生を対象とした勉強会なども開催し、相互に学び合う機会を設けることで、地域の学生と子どもたちとの交流を促進しました。

・まとめ

今後も、関係機関や地域の方々・企業との連携を強化し、子どもたちが安心して成長できる環境やより良い支援環境を整えるための取り組み続けていきたいと考えています。





(5) 【子ども達の様々な経験】

① 【毎日の経験『食育』】

・利用当初の子ども達の食事マナーの現状

te to teを利用するほとんどの子どもたちが利用当初、お箸やスプーンフォークの正しい握り方や使い方を知らず、食事中のマナーが身についていない現状があります。具体的には、お皿を持たずに食べたり、口を開けて噛んだり、お皿の中に食材を散らかしたり、犬食いをしてかき込む、肘について食べるといった行動が見られます。これらの行動は、家族との食事の時間のあり方から起こっているのではないかと推測しています。また、ファミレスやコンビニ、冷凍食品などの普及により、食事が目の前に提供されることが当たり前に感じられているのではないかとも考えています。

・食事の準備と感謝の心

食事の準備、料理、後片付けのお手伝いを通じて、子どもたちに「食」の始まりから終わりまでを知り考え、感謝できる機会を提供しています。人の手と愛情が積み重なって食べられることを理解し、楽しく食べることとお行儀が悪いことは一緒ではないことなどマナーの大切さも教えています。

・食事の挨拶と地産地消

「ありがとうございます。いただきます」というte to te流の食事の挨拶を通じて、感謝の気持ちを育んでいます。また、地産地消を意識し、ボランティアやスタッフが手作りの料理を提供し、食を通じて子どもたちに愛情を注いでいます。

・心と体の満足感

食に手をかけなければかけるほど子どもたちのお腹も心も満たされ、明日への生きる力へつながっています。食育を通じて子どもたちに食の大切さを伝え食事を楽しむことの喜びを感じてもらうことを目指しています。

・まとめ

食べることは生きることです。食事は単なる栄養補給ではなく、家族や仲間とのコミュニケーションの場でもあります。子どもたちが自分で食事を準備し、感謝の気持ちを持って食べることで、食に対する理解が深まり、より豊かな人間関係を築くことができると信じています。この活動を通して、子どもたちが自立した食生活を送るための基盤を作ることを目的としており、今後も引き続き、愛情を持って食育に取り組んでいきます。





② 【BSS山陰放送見学】

1. 見学の目的と概要

地元のTV局であるBSS山陰放送のご協力を得て、子どもたちがTV局の見学を行いました。この活動は、地域の散策を通じて、子どもたちが身近な環境を知る良い機会となりました。

2. 地域散策の意義

歩いて行ける距離にあるTV局への移動は普段車で移動することが多い子どもたちにとって地域の散策を楽しむ貴重な体験となりました。散策中には、足元に咲いている小さな花や鳥の声、地域にあるお店を知ることができ、地域への理解が深りました。

3. TV局での学び

TV局では、災害時に使用されるスタジオや災害用放送内容について学びました。

また、人が安全に避難できるようにするための言葉の使い方についても説明を受けました。子どもたちは「災害放送ってこういう意味もあったんだ」「こうやってTV番組ってできるんだあ」といった感想を持ち、強い関心を示しながら真剣に説明を聞いていました。

4. まとめ

この見学を通じて、子どもたちは地域の重要性やメディアの役割について理解を深めることができました。

今後もこのような体験を通じて、地域とのつながりを大切にしていきたいと考えています。





③ 【とりだいフェスへの参加】

1. 見学の目的と概要

鳥取大学医学部附属病院が主催した「とりだいフェス」に参加しました。このイベントは医療とエンターテイメントが融合したもので、子どもたちにも医療現場の取り組みや最新の医療機器を伝えることを目的としています。日頃から交流のある鳥取大学医学部ボランティアサークルの学生さんたちのご招待を受けての参加となりました。

2. 学びの内容

子どもたちは、ロボット手術が体への負担が少ないことや、救急車とドクターカーの違いについて学びました。また、ドクターカーの内部を見学することで、スピードを持って救命措置にあたることができる仕組みを理解しました。

3. 将来の夢のきっかけ

見学後には、看護師を目指したいという子どももいて、将来の夢を持つきっかけとなりました。このような体験を通じて、子どもたちが医療に対する興味を深め将来の進路を考える良い機会となったことを嬉しく思います。





④【地域のお仕事体験】

1.水洗い珈琲での体験

地域のお仕事を体験する機会をいただきました。最初に訪れたのは中国地方最高峰「大山」の麓でコーヒーを販売している「水洗い珈琲」さんです。子どもたちは、コーヒー豆を大山の湧き出る水で洗い、乾燥させ、豆を煎る工程を体験しました。この作業は一見単純に見えますが実際にはとても奥深く、難しいことを学びました。学習後には、珈琲の淹れ方も教えていただき、手作りのコーヒー牛乳をご馳走になりました。子どもたちは、その味の違いに感激し、雑味のないクリアで纖細な味わいが、彼らの持つ珈琲への概念を変える貴重な体験となりました。



2.JU高島屋での物産展体験

次に、JU高島屋での物産展とお歳暮販売のお仕事体験を行いました。物産展では、自分たちが販売する商品についての味見から体験が始まりました。味見をした後、販売を開始し、「ビールにあいますよ～」とお客様に声をかける子どもたちの姿も見られ、お客様に笑いを届ける場面もありました。この体験を通じて、子どもたちは商品を売る経験をするだけでなく、地域の方々との交流を持つ貴重な機会となりました。





「お味見いかが」接客体験 米子の百貨店で小学生たち

子どもたちが集まる地域拠点「te to te（テトテ）～つなぐん家（ち）～」（米子市角盤町1丁目）を利用する小学生から大学生までの8人が9日、JU米子高島屋で接客や販売の仕事を体験した。

同拠点は学校、家庭以外の「第三の居場所」。体験は開催中の「秋の北海道展」であり、カニやイクラの海鮮弁当、サツマイモのスイーツといった海の幸、山の幸が並ぶ。子どもたちは頭にバンダナを巻き、3店に分かれて接客した。「いらっしゃいませー」と大きな声を出し、注文を聞き取った。

知床産ジャガイモのポテトフライの店頭で、小学4年生の原田千楓（ちか）さん（10）は「お味見いかがですか」と客を呼び込み、量り売りも体験。「いつもは買う側だけど、売る側の気持ちが分かった」と話した。ステーキ弁当を担当した同6年生の持田竜之介さん（12）は「買ってもらえると、うれしくなった」と笑顔を見せた。

食品関係の催しを手がける米子高島屋の奥田和明課長は「自分が楽しいと思うことを形にしている。何でも楽しい気持ちを忘れずにやってみてほしい」とアドバイス。子どもたちは真剣に聞き入った。（吉川真人）





⑤【夏休みの体験活動】

夏休みには、プログラミングワークショップやソニー感動体験プログラム「世界で一つのオリジナルアニメを作ろう」、親子キャンプなど、貴重な体験活動の機会をいただきました。これらの活動を通じて、地域の方々とも交流することができました。

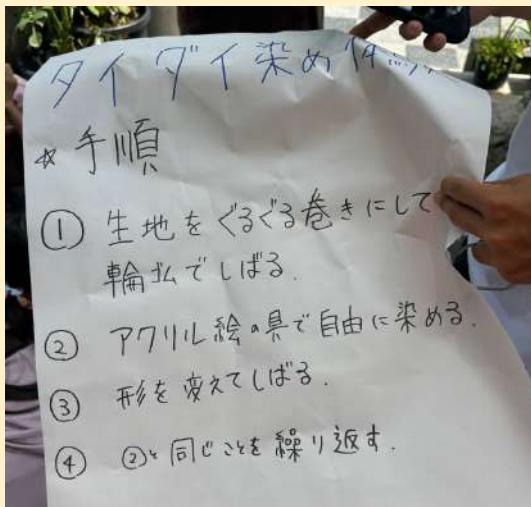
1. 幸せを呼ぶ魔法のこえかけ

「幸せを呼ぶ魔法のこえかけ、プラスの言葉」の授業では、子どもたちが言葉で傷ついた心を癒すだけでなく自分自身も人を傷つけず、心がほんわかあったかくなる言葉を学ぶことができました。この学びは、2学期のスタートに向けて良い準備となりました。



2.タイダイ染め体験

タイダイ染めではアクリル絵の具を使って身近にある生地の染め方を教えてもらい、アートなハンカチを染め上げました。中には、早速自宅でタイダイ染めを試してみた子どももあり、創造力を発揮する良い機会となりました。



これらの体験を通じて、子どもたちは新しいスキルを学び、地域とのつながりを深めることができました。今後も多様な体験活動を通じて、子どもたちの成長を支援していきたいと考えています。





⑥視察の実施

「te to te～つなぐん家～」の活動に興味を持ってくださった文部科学部会の国会議員の方々や文部科学省の職員の皆様が視察に来られました。

視察において、特に驚かれたのは、全ての不登校児童が学校に戻ったという事実です。一度は学校に戻った子も学校に行けずに「te to te」に戻ってしまっている実情も伝えました。しかしながら、再度学校を休むようになった子どもは、学校との何らかの関係性を持って戻っており、週に一度は学校に行っていることを伝えると、全員が驚かれそのような事ができるのかと何度も確認されました。全員が学校に戻ったその理由を尋ねられた際、はっきりとした原因是わからないもののいくつか考えられる事があり、その一つとして学校の先生が「te to te」に足を運んでくださるよう働きかけていることを紹介しました。学校の先生が子ども達の居場所であるte to teに足を運んで会うことは、子どもたちにとって「ここで過ごしていいんだ」「僕・私のことをちゃんと覚えてくれているんだ」など後ろめたさや罪悪感、自分否定を軽減し、「安心」につながるとお伝えしました。この安心の積み重ねが、学校に戻る力の一つになっていると考えています。また、視察を受けた子どもたちは、「頑張ってるね」「お利口だねえ」とおじちゃんたちに言わされたことを嬉しそうに話していました。視察に来られた方が一人一人を認めてくださったことは、子どもたちにとって小さな「認められた」の積み重ねとなり、自己肯定感の向上につながります。「te to te」を視察していただいたことで、私たちも元気をいただきました。視察を通じて、子どもたちを知り、認めてくださることは、支援者としての励みとなります。今後も子どもたちと共に未来に向かって1日1日を積み重ね、子どもたちの成長を支援し、安心して過ごせる環境を提供できるよう努めてまいります。





⑦季節の行事

「te to te」では、季節の行事を大切に過ごしています。

毎年、5月の節句、七夕、お盆、お月見、ハロウィン、クリスマス、お正月、節分、ひな祭り、卒業祝いなどの行事を行い、子どもたちと共にそれらを知り楽しみ、季節を感じています。

これらの行事は、昭和の頃に各家庭で行われていた伝統を子どもたちに体験させることを目的としています。「te to te」は子どもたちのもう一つの居場所であり、子どもたちが大人になり家庭を持った時に、次の世代にこれらの行事を伝えることができることを願っています。

季節の行事は、子どもたちにとっても楽しみであり、日頃から協力してくれている鳥取大学医学部のボランティアサークルの学生たちにとっても楽しみの一つとなっています。

昨年のクリスマスには、ボランティアサークルが吹奏楽部の学生にも声をかけ素敵なコンサートを開催してくれました。このようなイベントを通じて、地域のつながりや協力の大切さを実感しています。今後も季節の行事を大切にし、子どもたちが楽しみながら学び、成長できる環境を提供していきたいと考えています。





⑧「子どもミーティング」への参加

2024年3月に鳥取県が策定した「シン・子育て王国とっとり計画」の一環として、子どもが身の回りで感じている課題の解決に向けたアイデア発信や社会的活動の参加を促す「子どもミーティング」に参加しました。

このミーティングは、子どもたちが権利の主体として社会に意見を表明できることを知り、社会参画を促すことを目的としています。

鳥取県では、東・中・西部地区の3地区でミーティングを開催し、西部地区では「te to te」で実施しました。子どもたちは3グループに分かれ、普段感じている課題や疑問を付箋に書き出しました。具体的には、「学校にシャーペンを持っていけないのはなぜ」「大人もストレスがあると思うから、大人も夏休みがあればいいのに」といった意見や、観光振興として「蛇口からカニが出てきて観光客を喜ばせたい」といったユニークなアイデアが飛び出しました。

西部地区ではミーティングを3回行い、各グループは学校のルール変更や「ご当地バス」の運行実現をテーマに工場見学をして調べたり情報収集を行いました。

12月には「こどもまんなかアクションリレーシンポジウム」で発表を行いました。発表後、鳥取県子育て王国課が中心となり子どもたちの意見に対して関係機関が実現の検討や疑問について調べ、フィードバックを行いました。その結果、子どもたちは「実現できなかったことは残念だけれども、大人が自分たちの意見をきちんと聞き、調べ、向き合い、共感してくれたことが嬉し





かった」と話し、やってよかった、来年も取り組みたいと意欲を見せてくれました。

今回の経験は、子どもたちにとって「te to te」の会員だけでなく、地域の子どもたちとの交流や地域を知る機会、また学ぶ機会を得るだけでなく、大人を見直す機会にもなったように感じています。子どもたちが自らの意見を発信し、社会に参加することの重要性を実感できたことは、今後の成長にとって大な意味を持つと考えています。





3 事業総括

(1) 【事業の成果】

・学習支援・学校連携

午前中の支援活動を通じて、子どもたちの精神的なサポートや気分転換を図り、自己肯定感を高めることに成功しました。また、不登校や学校を休みがちな子どもたちに対して、静かな時間を設けることでリラックスした環境を提供し、学習への取り組みを促進しました。学習支援では、個別のニーズに応じたサポートを行い、子どもたちが自信を持って学びに向かえるようになりました。

・生活支援・相談支援

生活リズムの改善支援や通所支援を通じて、子どもたちとその家族が安心して生活できる環境を整えることができました。保護者への支援も行い、母子関係や生活リズムの改善に寄与しました。

・学校・地域・行政との関係構築

不登校利用者の学校とのつながりを強化し、担任の先生との連携を通じて、子どもたちが学校に戻る機会を増やしました。また、地域との連携を深めることで、ボランティアや地域企業からの支援を得ることができました。

・子どもたちの様々な経験

食育や地域のお仕事体験、夏休みの体験活動を通じて、子どもたちが新しいスキルを学び、地域とのつながりを深めることができました。特に、医療現場の見学や地域の散策を通じて、子どもたちの興味や将来の夢を育む機会を提供しました。

(2) 【課題と対応案】

・課題

一部の子どもたちは、依然として学校に戻ることに対する不安や恐怖感を抱えており、完全に登校できない状況が続いている。特に、学習面での不安や過去のトラウマが影響している場合が多く見受けられます。また、家庭環境や生活リズムの乱れが影響し、通所が難しい子どもたちも存在します。これにより、支援が必要な子どもたちが十分にサポートを受けられない状況が生じています。地域との連携は進んでいるものの、さらなるボランティアや





支援者の確保が必要です。特に、専門的な知識を持つ支援者の不足が課題となっています。

・対応案

学校に戻ることに対する不安を軽減するために、個別の相談やメンタル面でのサポートを強化し、子どもたちが安心して学校に戻れるような環境を整えることを目指します。また、学校との連携を深め、教師が子どもたちの居場所を訪れる機会を増やすことで、信頼関係を築くことが重要です。生活リズムの改善に向けて、保護者と連携し、家庭での生活習慣を見直す支援を行います。具体的には、生活リズムの改善に向けたワークショップや個別相談など定期的に行い、保護者が子どもたちをサポートできるような情報提供を行います。地域との連携をさらに強化するために、ボランティアの募集や地域企業との協力を促進し、支援者のネットワークを拡大します。また、地域のイベントや活動に積極的に参加し、子どもたちと地域住民との交流を深めることで、相互理解を促進します。これにより、地域全体で子どもたちを支える意識を高め、支援の輪を広げることを目指します。また、地域企業との連携を強化し、企業の社会貢献活動として子どもたちへの支援を促進します。具体的には、企業との共同イベントやワークショップを企画し、子どもたちが地域の資源を活用できる機会を提供します。支援者向けに地域の教育機関や専門職による研修や勉強会を開催します。これにより、支援者のスキル向上を図り、より効果的な支援が行える体制を整えます。最後に、定期的な評価とフィードバックを行い、支援活動の効果を測定し、必要に応じて支援内容や方法を見直すことで、子どもたちにとってより良い支援環境を提供していきます。このように、課題に対する具体的な対応案を示すことで、今後の取り組みをより効果的に進めていくことができると思っています。

(3) 【次年度以降の取り組み】

・個別支援の強化

各子どもたちのニーズに応じた個別支援をさらに強化します。特に、学習面やメンタル面でのサポートを充実させるために、専門家との連携を深め、個別の支援計画を策定します。定期的な進捗確認を行い、必要に応じて支援内容を見直します。

・地域との連携の深化

地域の学校や福祉機関、企業との連携をさらに深化させ、地域全体で子どもたちを支える体制を構築します。地域イベントやワークショップを通じて子どもたちと地域住民との交流を促進し、相互理解を深める機会を増やします。





- ・ボランティア育成プログラムの実施

ボランティアの質を向上させるために、育成プログラムを実施します。具体的には、ボランティア向けの研修や勉強会を開催し、支援者としてのスキルや知識を向上させることを目指します。

- ・メンタルヘルス支援の充実

子どもたちのメンタルヘルスを重視し、専門家によるカウンセリングや心理的サポートを受けられるよう連携を強化します。また、保護者向けのメンタルヘルスに関する情報提供や相談、専門家への紹介を行い、支援者の連携を強化して家庭全体でのサポート体制を整えます。

- ・成果の評価と改善

定期的に活動の成果を評価し、フィードバックを受けることで、支援活動の質を向上させます。具体的には、子どもたちの成長や変化を測定する指標を設定し、定期的に評価を行います。

